

ソ連史

160781173 武藤 高明

ちくま新書 253ページ

1) 第1章ロシア革命からスターリン体制へ

a) ロシア革命

ア) ソヴェト誕生

i) 1905年にロシア第一革命が発生

→その時にソヴェト（会議）設立



1917年に二月革命が発生、再び結成

ii) この時臨時政府も存在し、一時的に
二重権力を承認

→十月革命で臨時政府を打倒

イ) ソヴェト連邦成立

旧帝国領内各地にソヴェト共和国樹立

→ロシア連邦はこれらを統合しソヴェ
ト連邦が形成

b) ソ連の政治体制

ア) スターリン独裁と大テロル

i) 1924年にレーニン死去

→権力闘争後、1930年代にスターリン
の独裁開始

ii) 1936～38年、第1～3次モスクワ裁
判開廷

→主に党や政府の最高幹部の人が有罪

→1937年8月から国民全般対象の大
量弾圧（大テロル）開始



結果：経験豊富な労働者減少し、経済悪化

c) 条約とソ連

ア) 独ソ不可侵条約締結

英仏と対独集団安全保障確立を要望

→互いの利害不一致で実現不可

→ドイツと1939年に締結

イ) 独ソ不可侵条約秘密議定書

ポーランドを中心に独ソ両国の勢力圏の
取決め

2) 第2章大祖国戦争と戦後ソ連

a) 大祖国戦争

ア) ドイツの侵攻

i) ドイツ、1940年12月対ソ戦争準備
発令

→スターリン、ヒトラーと交渉で回避
可能と予測



スターリン、予想不的中

→1941年ドイツがレニングラードを包囲、以後2年以上で100万人死亡

ii) 独ソ戦時

ドイツとの戦争により様々な物資が不足、損失

また、国内のドイツ系住民を東方へ強制移住→スパイ防止のため

b) ソ連戦勝

ア) 戦勝の成果

国際社会が評価

→国際連合の安全保障理事会の
常任理事国に

イ) 戦勝と失望

戦争が終結し国民は緊張緩和に期待

→しかし復興優先により、国民
は再びつらい道へ

c) 冷戦の始まり

ア) 冷戦の開始と熱戦の恐怖

第二次大戦後、ソ連は東欧諸国を自国の勢力圏と主張

→社会主義の輸出よりも緩衝地帯の確保が目的

イ) スターリン時代の終焉

スターリン、1953年に脳の発作で死去
→国民、将来に不安と期待

3) 「非スターリン化」から「共産主義建設」へ

a) 雪解けとスターリン批判

ア)雪どけ

1953年に新指導部、緊張緩和に方針転換

i) ソ連最高会議幹部会令「大赦」

→しかし、治安悪化の面も

ii) 国民の生活改善

→全般に商品が不足、増産急務

イ) スターリン批判

1956年2月に新指導部下での第20回党大会開催

→同年2月25日にフルシチョフ、スターリンを批判

内容として

- i) 不法な抑圧
- ii) 戦時中の民族強制移動
- iii) 戦後の抑圧強化や農民の収奪 etc...

b) ソ連の経済改革

ア) 国民経済会議設立 (1957年2月)

フルシチョフによる提案で、部門関係なく当該地域の工業企業の管理を委託

→全国規模で生産と物流に支障と混乱発生、1964年フルシチョフ失脚

→開発遅延の地域では効果あり

イ) MTS改組 (1958年3月)

農業集団化で、耕地大規模化、トラクターなど使用、農業の生産性向上

→コルホーズの農業機械所有は不認定
そこでフルシチョフは以下の内容実施

i) MTSをRTS（修理・技術ステーション）に改組

ii) 農業機械のコルホーズへの売却

しかしコルホーズの経済負担増加

4) 第4章安定と停滞の時代

a) 農民の変化

ア) 農村の「非農民化」

1920年代末から農民が都市へ流出

原因：工業化や戦争の復興

又、工業重視の州は農業軽視

イ) 農民の「労働者化」

コルホーズ、ソフホーズに保証賃金、
年金制度が整備

→賃金や年金で生活し、付属地での生産を放棄

b) 雪どけと停滞

ア) 「雪どけ」から引き締めへ

抽象芸術などの検閲が再び強化

→引き締めの批判者が出現

→批判者を国外追放

イ) 「停滞の時代へ」

1968年1月にチェコスロバキアでプラハの春が

→ソ連中心の5カ国軍が制圧、これを機に改革を警戒、停滞の時代へ

b) ソ連の軍事外交

ア) 米ソの軍備管理交渉と緊張緩和

i) 1969年11月、SALT (戦略兵器制限交渉) 開始

→1972年にSALT I 協定調印

ii) 1970年代にオイルショック突入

→ソ連は産油国のため、石油輸出、
多大な外貨獲得

→国民の生活水準が底上げ

イ) アフガニスタン侵攻

1979年にアフガニスタン、アメリカと
関係改善願望

→ソ連軍事介入、アメリカとの関係
悪化し「新冷戦へ」

5) 「雪どけ」以後のソ連のいくつかの特徴

a) 体制への期待と生活水準の向上

ア) 体制への期待

1950～60年代、国民は共産主義体制を支持

→1970年以降国民の生活向上、しかし共産主義実現に不信感、努力放棄

イ) 生活水準向上の努力

共産党の目的は「人民の幸せ」

→建前だが支配正当化には、国民の生活水準向上が一番

b) ソヴェト政権と民主主義

ア) ソヴェト政権の「弱さ」と「自由」

i) 1960年代に未成年者の犯罪多発

→学校を卒業後も就職難

→生産目標達成を最優先

ii) 住民へのサービスは公営が担当

→公営のサービスは不十分、代わりに私営を利用

→政府もその「自由」を暗黙裡

イ) 一党制民主主義

ソヴェト政権は政策を修正、幅広い民意の実現の努力

→国民の要望をなるべく考慮

6) ペレストロイカ・東側陣営の崩壊・連邦の解体

a) ペレストロイカとグラスノスチ

ア) 規律引締めから「ペレストロイカ」へ

i) 1980年代初頭、物不足と行列一層激化→規律引締めへ

結果：国民の期待大

しかし、1984年、書記長アンドロポフ就任2年目で死去

- ii) 1985年3月にゴルバチョフ、書記長に就任、国内は惨憺たる状態
 - 社会主義の成果の宣伝抑制、規律と秩序の回復

イ) グラスノスチ

1950～70年代に市民の提案を重視

→実現は不可

1987年にゴルバチョフは、市民による批判を奨励

b) ソ連解体とその後

ア) ソ連解体

i) 1991年の後半から末に、15の民族共和国に解体

→諸民族間に対立、激化

原因：経済的な利害意識

→民族戦争勃発

ii) 1991年12月、ロシア、ウクライナ、ベラルーシが独立国家共同体設立

→後にバルト三国、グルジア以外の
11カ国が合流

iii) 同年12月25日に、ゴルバチョフが
ソ連大統領の職務停止を宣言

→ソ連は解体

イ) 連邦解体後の旧ソ連諸国

i) バルト三国、ヨーロッパ連合に加入

ii) ウクライナ、グルジアで革命も民主
化、自由化非達成

7) 結論

ソ連社会主義の存在は相当

理由：西側先進国の知識人・貧困労働者魅了